

世界救世教①之光教団 新穀感謝祭 教主様お言葉

於： ① 之光教団本部

皆様、本日は新穀感謝祭おめでとうございます。

誠に畏れ多いことではありますが、唯一の神である主神は、私ども一人ひとりの創造主であります。

主神は、ご自身のみ心を継承させる子をお生みになるという目的をもって天国を用意され、その天国において、メシアという御名を帯びた無数の霊をお生みになりました。

このメシアと名付けられた主神の霊が、大光明輝く私ども^{わけみたま}分霊であり、今度は、私ども一人ひとりが、主神の子たるメシアという立場を全うするために、人間として地上に遣わされております。

主神は、明主様を私どもと同じように地上にお遣わしになり、ご自身の子たるメシアを生むという目的を明主様のうちに成し遂げられました。

このことを、明主様は、「メシヤが生まれた」あるいは、「新しく生まれる」と仰せになったと私は思います。

主神は、私どものうちにおられて、私どもを明主様とひとつに結び、主神の子たるメシアという立場を全うすることができるように、大光明の輝きをもって私どもを照らし、養い育てながら、天国に迎え入れてくださっております。

先程は、皆様を代表して〇〇さんより感謝奉告をご発表いただき、ありがとうございました。

喜びを共にさせていただくとともに、ご発表を通して、私は、人間の心掛けや行いの善し悪しを越えて、主神の大光明が自分の中だけではなく、どんな人々の中にも輝いておられることを認めさせていただく必要があると感じさせていただきました。

そして、主神は、人間の善悪を越えた赦しをもって、私どもの心の奥底までも照らし出し、自分では中々気づくことのできないところを気づかせてくださり、天国に迎え入れてくださっていると感じさせていただきました。

主神は、喜びや感謝を感じていらっしゃらないと思われる方を私どもの周りに用意してくださって、私ども自身の中に真の喜びや感謝を忘れていた姿があったことを気づかせてくださっておられます。

ですから、私どもは、主神が明主様と共に、家族や周囲の方々を始め、すべての人々のうちにお働きくださり、また、大自然を始めとする万物のうち

にお働きくださって、私どもを養い育ててくださっていることに、心から感謝させていただくことが大切ではないかと思わせていただきました。

また、私は、折に触れ、皆様から寄せられる数々の感謝奉告を読ませていただくたびに、心打たれ、また、励まされております。

私は、皆様と同様、日々の生活の中で、何事も感謝で受けとめようと思おうとしても、厳しい現実を目の前にして、感謝できない時があります。また、浄化は神の恵みであると教えられていても、とてもそのようには受けとめられない時があります。

しかしながら、皆様の中には、そうした時こそ、明主様が来てくださって、すべてをお赦しになり、すべてをお受け取りくださっていると気づかれ、自分自身を明主様を通して主神に委ねることに努めておられる方がいらっしゃることを、私は大変心強く思っております。

私も、成井理事長を始め、皆様と共に、夜昼転換した全く新しい創造の営みの中で、どんな時でも私どもを愛し、赦してくださっている主神を心から信頼し、すべてを主神の現れであると認めさせていただくという実践、すなわち、主神が実在しておられるという明主様のみ教えの実践に努め、前進してまいりたいと思わせていただきました。

本日は、新穀感謝祭であります。祭典が始まります前に、農産物や展示パネルを、ご説明をいただきながら拝見し、生産者を始めとする皆様の自然農法にかけられるひたむきな情熱に触れさせていただきました。

本日のみ教えにもありますように、明主様は、万物の生命力の根源である力、すなわち、主神の力を認め、土を愛し、土を尊重することこそ、真の農法であることをみ教えくださいました。

皆様が、この主神の力を認めさせていただくという実践に素直に取り組んでおられることを大変ありがたく思いますとともに、そうした皆様の上に、明主様の力強いお導きがありますよう願っております。

収穫の秋と申しますが、私どもは、作物の種を蒔き、大切に育て、稔った作物を収穫し、神様へのお供えをいたします。

そうであれば、私ども自身も、私どもの生みの親であり、育ての親でもある主神に収穫していただかなければならない存在なのではないでしょうか。

それでは、主神にとっての収穫とは、どのようなことなのでしょう。

私は、主神にとっての収穫とは、主神が私ども一人ひとりを養い育て、稔らせた‘実’として、ご自身の天国に迎え入れることであると思います。

なぜならば、冒頭に申し上げましたように、主神のご意志は、私ども一人ひとりをご自身の子たるメシアとする、ということであるからです。

この目的を全うするために、主神は、天国という始まりの世界において、私どもをご自身の分^{わけ}霊^{みたま}としてお生みになりました。

この分霊が、主神のご意志が組み込まれた‘種’と申せると思います。

主神は、ご自身の種である私ども分霊を地上にお遣わしになり、一人ひとりに、自我の心、すなわち、人間性という‘花’を見事にお咲かせになりました。

そして、その人間性をあたかも私どものものであるかのようにさせてくださいました。

喜怒哀楽を始め、感謝できる心も感謝できない心も、人の幸福を願う利他的な心も、利己的な心も、どのような心の表現であれ、それらを主神は、私どもが自分自身で培い、自分自身で表現している人間性であるかのようにしてくださっていたのです。

私どもは、主神ご自身が創り、育ててくださった人間性を、あたかも自分たちの人間性であるかのごとく思い違いをしておりました。

主神は、その思い違いをしていたという罪に私どもが気づいてほしいと強く願っておられます。

そして、私どもが夜昼転換という千載一遇の赦しを素直に受け入れ、そうした罪から赦され、救われたものとして天国に立ち返ってきてほしいと呼びかけてくださっております。

ですから、私どもが主神に対し、“今までわたしのもののようにしていた、感謝する心も、感謝できない心も、人の幸せを願う心も、願えない心も、これらの人間性はあなたのものでしたのですね。この人間性をあなたにお返しいたしますので、あなたのものでしてお使いいただきますように、”と意思表示させていただき、自分のもののようにしていた人間性と共に、分霊である私ども自身を、明主様を通して主神に委ねさせていただくことによって、主神は、明主様に結ばれた私どもをご自身の子、すなわち、ご自身が創り、育てた良き‘実’として、喜んで収穫してくださるのではないのでしょうか。

そして、明主様のうちに成し遂げられたように、収穫した私どもを新しく生まれさせ、新しく生きるもの、永遠に生きるものにさせてくださるのではないのでしょうか。

本日の祭典の一首目のお歌は、

「花ちれど実^{あめつち}はみのるらん天地は栄え果てなきものにしあれば」という明

主様のお歌でありました。

主神は、咲く花が実を結ぶように、明主様の人間性という‘花’を天国に迎え入れ、主神の子として新しく生まれさせる、すなわち、主神ご自身の‘実’を結ばせるというみ業を、明主様のうちに成し遂げられました。

私どもも、明主様に結ばれたものとして、畏れ多くも、主神ご自身の‘実’となるべき存在であります。

私どもは、主神の大いなる赦しのうちに、一人ひとりが主神の子として新しくお生まれになった明主様を継承させていただくことができるように養い育てられていることに感謝し、魂の親であられる主神を、明主様と共にあるメシアの御名にあって、皆様と共に、心からお讃え申し上げたいと思います。

終わりに、夜昼転換し、全く新しい段階の養いに入った今、私どもは、赦しと救いの源である燦然と輝く大光明が、自らの内なる天国に存在していることを信じ、明主様と共に、主神にお仕えさせていただきます。

ありがとうございました。

以 上